■「ちくま評論入門」解説――読解問題への過程

1　森達也（もりたつや）「真実はひとつじゃない」

●出典『世界を信じるためのメソッド』【081/Y1/1-18】（北野高校図書館にあります）

■目標

●タイトルから見通しをつけよう
●事例と考えを区別して読もう
●主張を捉えた上で、自分の問いを持とう

〈読む〉ことは、〈書く〉ことで初めて完成します。設問は、読み、書くための目印です。ここでは、設問に答えることを目指して、〈読む〉と〈書く〉がどのように連携するか、その過程をたどってみます。

解説には、二つのポイントがあります。①読む＝追跡の技法、②書く＝解答を作るための技法。たまたまそこだけは読めた、書けた、というのでは、違った文章や設問には応じきれません。国語にも、ある程度、一般的なやり方が存在します。繰り返し経験することで、自分のものにして下さい。

■追跡

① 映像を編集するとき、音と映像を分けて編集することがある。これを専門用語でインサート（挿入）という。難しい技術じゃない。テレビや映画の業界では、誰もが当たり前のように使う手法だ。そしてこの手法を使えば、世界をいくらでもアレンジすることができる。場の雰囲気を変えることなど、とても簡単だ。

細かくいうと、「そして」以前が事例の提示、以後が考えの提示。「（映像編集では）インサートの手法を使えば、場の雰囲気をかんたんに変えられる。」ここがこの論のスタート地点だ。ここで私たちは〈読み〉のスイッチを起動させる。それは、

◆問いかける

ということだ。「インサートの手法ってどんなもの？」「場の雰囲気がどう変わるの？」「筆者はかんたんに変えられることを、いいことだといおうとしているの？　悪いことだといおうとしているの？」…

最初に筆者自身が〈問い〉をポンと出してくる場合もある。しかし、そうでない場合もある。いずれにせよ、問いかけよう、問いを捉えよう、という目で追い始めること。書き手は読み手の問いを想定して、書き継いでいく。私たちは、それを追う――。

② 具体的な例を挙げよう。たとえばあなたの学校の数学の授業の様子を、テレビ局が撮りにきたとする。
③ 後日、その番組が放送される。学校の簡単な紹介が終わったあと、教壇で先生が、黒板に連立方程式を板書しながら一生懸命に喋っているカットが映る。
④ その先生のカットのあとに、先生の話を聞くあなたたちのカットがインサートされる。映像はあなたたちの顔だけど、先生の話は続いている。カットが変わるときにも、先生の話が途切れたりはしない。なぜならこの場合、音は音だけでずっと切れ目を入れずに使っているからだ。この音をベースにして、教壇に立つ先生の映像と、音を消したあなたたちの表情の映像を交互に繋ぐ。これをカットバックという。
⑤ このとき、あなたたちのどんな表情を使うかは、その映像を編集する人の判断に任せられる。一生懸命に頷きながら聞いている映像を使えば、とても熱心な先生と、真面目に授業を受ける生徒たちというシーンになる。でもあなたがたまたま欠伸をかみ殺していたり、隣の席の誰かが一瞬だけ窓の外を眺めているような映像を使えば、先生の熱心さが空回りしている授業というシーンになる。

具体例。インサート。カットバック。たしかによく目にする手法だ。ここで捉えておきたいのは、「場の雰囲気がどう変わるか」という、私たちの問いかけに応じる箇所があることだ。「どんな表情を使うかは、映像を編集する人の判断による」。つまり、（映像に映る）場の雰囲気は、編集者の判断＝意図によって変えられる、ということである。「それってありなの？」。そうだ。これが書き手が設定した〈問い〉に違いない。映像には事実が映っていると思っているけれど、じつは編集者が意図的に雰囲気を変えることが（かんたんに）できる――それって、ヤバくないの？　…という問題意識をもって、進んでみよう。

⑥ これがインサートだ。番組を注意して見れば、こんなシーンはいくらでもある。そしてそんな場合、1場の雰囲気をどう再現するかは、編集者の思いのままなのだ。一生懸命に先生の話を聞いているあなたと、欠伸をかみ殺しているあなたは、どちらも授業中のあなただ。どちらも嘘ではない。でもどちらをインサートに使うかで、授業の印象は大きく変わる。いや、授業だけじゃない。あなたへの印象も、どちらを使うかでまったく変わる。

さて、読解問題登場。ここで考えてみよう。

1「場の雰囲気をどう再現するかは、編集者の思いのまま」とあるがなぜか。

直観的にはもうわかる。どのように答案に仕上げるか。例えば、前後なく、単文で「場の雰囲気をどう再現するかは、編集者の思いのままだ」とだけ書いてあったと仮定すると、問いの意図が見える。読んだ人は、「そんなことできるかな。どうやってするのかな」と思うだろう。つまり、傍線部だけでは、納得するための情報が足りないのだ。

失敗せず答案に仕立てるための技法を二つ。

★傍線部延長。

★〈なぜ〉は〈どのように（どういうこと）〉。

傍線部を前に延ばしてみる。

「これがインサートだ。番組を注意して見れば、こんなシーンはいくらでもある。そしてそんな場合、1場の雰囲気をどう再現するかは、編集者の思いのままなのだ。」

すると、指示語が含まれていることがわかる。指示内容の補い＝情報の補い。補ってみる。

「先生の（メインの）映像に生徒の（別の）映像を挿入する場合、場の雰囲気をどう再現するかは、編集者の思いのままなのだ。」

次に、〈なぜ〉ではなく〈どのように〉と問い直してみる。編集者は〈どのようにして〉思いのままに場の雰囲気を再現するのか？　――それはどこに書いてあった？　ここだ。「あなたたちのどんな表情を使うかは、その映像を編集する人の判断に任せられる。」「編集者は」を主語にして書き換えると、

「編集者は、生徒のどんな表情を挿入するか、自分の判断で決める。」

これを使い、先生とか生徒という例を一般化してつなぐと、

「（メインの映像に）別の映像を挿入する場合、編集者は、どんな場面を挿入するか、自分の判断で決めることによって、場の雰囲気を思うとおりに再現する。」

傍線部とは、〈どういうこと〉か、の答えなら、これでいい。ここでは〈なぜ〉なので、

（解答例１）「別の映像を挿入する場合、編集者は、どんな場面を挿入するか、自分の判断で決めることによって、場の雰囲気を思うとおりに再現できるから。」（65字）

四〇字以内で、といわれたらどうする？　「（編集者の）思うとおり」になる理由の核心は、

（解答例２）「編集者は、どんな場面を挿入するか、自分の判断で決めることができるから。」（35字）

逆に、八〇字で、といわれたら？　何を足す？　目をつけるのはここ。「一生懸命に頷く映像を使えば、――。でも窓の外を眺めている映像を使えば、――。」これは例だが、この例は、「どんな映像を（部分的に）挿入するかによって、その場（全体）の雰囲気の捉え方が変わってしまう」というインサート手法の効果を示している。こういう効果があることが前提なのだから、

（解答例３）「どんな映像を挿入するかによって、その映像が映し出す場全体の雰囲気を変えられるが、編集者は、どんな映像を選択するか、自分の判断で自由に決めることができるから。（78字）」

このように、要求される文字数によって、盛り込む情報量も変わる。〈なぜ〉という問いを苦手と感じる人もあると思うが、その理由は、どこまで書けばいいのか迷うことにあるのではないかな。「どんなシーンでも使えるから」かなあ。「シーンによって印象が変わるから」かなあ。どれも理由っぽいけど…。とりあえず、大きなズレを防ぐには、

★**〈なぜ〉は〈どのように〉。**

といったん考えて、どのようなプロセスで、編集者は思いのままにやっていくのかな、と考えてみましょう。

⑦　インサートは映像の編集技術のひとつの例だ。他にもいろんな技術はある。とにかく、映像はこのように「作られる」ものだということを、まずあなたには知ってほしい。たしかに事実の断片を寄せ集めてはいるけれど、できあがったものは事実とは微妙に違う。メディアが嘘つきであると言っているわけじゃない。もっと正確にいえば、メディアは最初から嘘だと思っておいたほうがいい。だって授業中にテレビカメラが教室にあれば、誰だって緊張する。誰だって普段とは違う言動をする。カメラが撮れるものは、カメラの存在によって変わった現実だ。ありのままではない。盗み撮りや監視カメラの映像は別にして、カメラはそもそもありのままなど撮れないのだ。

筆者の考え→主張が端的に登場する。「映像は作られるものだと知れ」。

しかし、「メディアが嘘つきであると言っているわけじゃない」といいながら、「メディアは最初から嘘だと思っておいたほうがいい」というのは「？」。

「カメラはありのままを撮れない」に注目。撮ろうとしても撮れない。カメラで撮ったもの（メディア）は、編集前の映像であっても、ありのままではない。これが「最初から嘘」の意味だ。

⑧　その嘘を集めて、記者やディレクターが現場で感じ取った真実を追究する。それがメディアのあるべき姿だと僕は思っている。

⑨　だからメディアをすべて信じこんでしまうことも問題だけど、すべてを嘘なのだと否定してしまうことも少し違う。ほとんどの記者やディレクターは、そんな嘘を集めながら、真実を描こうと懸命に頑張っている。〔でも中には、頑張っていない人もいる。あるいは頑張る方向が、視聴率や部数などの数字を高くすることに向かう人もいる。記者やディレクターが伝えようとする真実を、「客観性が足りない」とか「中立公正でない」などの理由で、つぶそうとするデスクやプロデューサーもいる。〕

ここも主張。「メディアのあるべき姿」とは？　「その嘘を集めて、記者やディレクターが現場で感じ取った真実を追究する」＝「ありのままではないかもしれない映像だが、それらを素材として、取材者が自分の目や耳を通して現場で感じ取った真実＝ほんとうのことを、見る者に伝わるように編集する」。

このとき、鍵になるのは、その「記者やディレクター」の感じ取る力、考え方、姿勢だ。もし、彼らが偏見を持っていたり、取材する前から結論を決めていたりしたら、ほんとうのことは取り出されない。〔　〕でくくった部分は、補足的な部分だが、現代を生きる私たちにとって重要な問題だ。権力やお金が、ほんとうのことをねじ曲げてしまうという問題である。

⑩「森さんはヤラセをやったことはありますか？」と時おり訊ねられる。そんなとき僕は、その質問をした人が、どんな意味でヤラセという言葉を使ったのかを聞き返すようにしている。

⑪　事実にないことを捏造する。これがヤラセだ。事実は確かにある。でもその事実をそのまま皿に乗せても食べづらい。だからみんなが喜んで食べてくれるように調理をする。これは演出だ。

⑫　ヤラセと演出のあいだは、実はとても曖昧でわかりづらい。そんなに単純な問題じゃない。でもひとつだけ言えることは、自分が現場で感じとった真実は、絶対に曲げてはならないということだ。

ここにも主張が現れる。筆者の信念ともいうべきことだ。彼のさまざまな経験が背景にあることが想像される。

事実と真実の使い分けにも注意したい。生徒があくびした。これは事実。生徒がいっしょうけんめいノートに書いた。これも事実（いっしょうけんめいに書くふりをさせたら、捏造）。しかし、この生徒がだらしないのか、まじめなのか、事実の断片からは決定できない。生徒の放課後を追い、生活の実態を取材し、生徒が先生のある話に対して、目を光らせたのを感じ取った――こうやって初めて、生徒のあくびやノートの内容の意味が見えてくる。現場で、対象

に寄り添い、関係を構築し、初めて〈真実〉が見えてくる。

⑬「たったひとつの真実を追究します。」

⑭　こんな台詞を口にするメディア関係者がもしいたら、２あまりその人の言うことは信用しないほうがいい。確かに台詞としてはとても格好いい。でもね、この人は決定的な間違いをおかしている。そして自分がその間違いをおかしていることに気づいていない。

⑮　真実はひとつじゃないと言ったら、あなたは驚くだろうか。でもそうなんだ。事実は確かにひとつだよ。ここに誰かがいる。誰かが何かを言う。その言葉を聞いた誰かが何かをする。たとえばここまでは事実。でもこの事実も、どこから見るかで全然違う。つまり視点。思いだしてほしい。事実は、限りなく多面体なのだ。

２「あまりその人の言うことは信用しないほうがいい」とあるがなぜか。

この問いもここで考えよう。もちろん、★**傍線部を延長**して、

「たったひとつの真実を追究します、といった台詞を口にするメディア関係者がいたら、あまりその人の言うことは信用しないほうがいい」と筆者が言うのはなぜか、が問いの全部。

傍線部の後も見よう。

「この人は決定的な間違いをおかしている。そして自分がその間違いをおかしていることに気づいていない」。

「この人は決定的な間違いをおかしているから。」なんだが、では、その間違いとは？

端的な答えは、**「真実はひとつじゃないから。」**。もう少し足して、

（解答例１）「（その人は）真実はひとつではないことに気づいていないから。（23字）」

「事実も、どこから見るかで全然違う」をふまえて長い答案にすると、

（解答例２）「事実はどこから見るかで異なり、したがって、それらから感じ取る真実もひとつではないことに気づいていないから。（53字）」

２に挿入した内容は、３番の設問とかぶる。３番の答えと切り分けようとする人は迷うかもしれない。これは解く人のせいではなく、問題の作り方の問題である。ちょっと作り方が甘いかも。

⑯　あなたのクラスの授業。カメラをどこに置くかで見えるものはまったく違う。先生の立っている場所にカメラを置く場合と、クラスの問題児の席のすぐ傍にカメラを置く場合とで、世界はまったく変わる。３世界は無限に多面体だ。

⑰　これが事実。現象や事件。物事にはいろんな側面がある。あなたが今日、夕ご飯を食べながら、「最近あまり勉強していないんじゃない？」とお母さんに言われて、思わず口答えをしてしまったとする。口答えの理由は何だろう？

⑱　（略）

⑲　あなたの本当の心情は僕にはわからないけれど、でもどれかひとつだけが正解で、あとは全部間違っているということはないんじゃないかな。事件や現象は、いろんな要素が複雑にからみあってできている。どこから見るかで全然違う。

３「世界は無限に多面体だ」と筆者が考えるのはなぜか。

なぜか、と問うているが、実質は★**なぜ→どういうことか**、で考えればいい。「世界は無限に多面体だ。これが事実。現象や事件。」と続くのだから、「事実・現象・事件と呼ばれているもの（世界）は、無限に多面体だ」といっていることになる。「事件や現象は、いろんな要素が複雑にからみあってできていて、どこから見るかで全然違う」という内容も出てくるから、これらを整理して、多面体とは、

「事実・現象・事件と呼ばれているものは、いろんな要素が複雑にからみあってできていて、どこから見るかで全然違って見えるということ。」となる。これを「から止め」して、

（解答例）「事実・現象・事件と呼ばれているものは、いろんな要素が複雑にからみあってできていて、どこから見るかで全然違って見えるから。（67字）」

⑳　その複雑な多面体が事実。でもこれを正確に伝えることなどできない。だからメディアはどれか一点の視点から報道する。それは現場に行った記者やディレクターにしてみれば、事実ではないけれど、彼や彼女の真実なのだ。

・視点を変えれば、また違う世界が現れる。視点は人それぞれで違う。だから本当は、もっといろんな角度からの視点をメディアは呈示するべきなのだ。いや、呈示されるはずなのだ。

・でも不思議なことに、ある事件や現象に対して、メディアの論調は横並びにとても似てしまう。なぜならその視点が、最も視聴者や読者に支持されるからだ。

・だからあなたに覚えてほしい。事実は限りない多面体であること。メディアが提供する断面は、あくまでもそのひとつでしかないということ。もしも自分が現場に行ったなら、全然違う世界が現れる可能性はとても高いということ。

わたしたちが事実と呼ぶものは、じつは「複雑な多面体」だと筆者はいう。私たちは同時に無限の視点をとりえないのだから、自分が見たものについては、ある視点から見た事実（の一側面）というのが正しい。

メディアから流れてくる映像は、作り手が、現場に立って、取り得た視点から感じ取り、伝えたいと考えた、「ほんとうのこと」の一つなのである。

■読解問題

１「場の雰囲気をどう再現するかは、編集者の思いのまま」とあるがなぜか。

２「あまりその人の言うことは信用しないほうがいい」とあるがなぜか。

３「世界は無限に多面体だ」と筆者が考えるのはなぜか。

■発展問題

●この文章を読んで思い浮かべた事例を挙げ、それらを材料にして、私たちは「複雑な多面体」にどう向き合えばいいのか、その可能性や課題について書きなさい。

●重要語「現象」＝あらわれかた　と置き換えて読もう。